

要旨

本研究では、日本におけるトラの本剥製を研究の対象とし、その保存・活用の変遷と現状について明らかにすることで、剥製文化が継承・発展していくための知見を得ることを目的としている。

自然史標本の一形式である本剥製は、これまでに様々な方法で活用されてきた。しかし一方で、現在の教育機関では廃棄処分も行われることがあり、貴重な資料の散逸という問題が顕在化している。こうした背景を踏まえ、特に動物としてトラに焦点を当てつつ、本剥製の保存と活用の実態について分析した。

文献調査を行うことでトラと人間との関わり、および本剥製の歴史について整理した。さらに、本剥製の製作活動を行う日本の剥製業者 73 件にアンケート調査を行った。そのうち 2 件の企業には電話によるインタビュー調査を実施した。また、本剥製の保存と活用を行う日本のミュージアム 381 館にもアンケート調査を行った。そのうち 7 件のミュージアムに追加でアンケート調査、インタビュー調査を実施した。

本研究では、はじめにトラと人間との関わりについて整理し、日本におけるトラに対する価値観を分析した(第 1 章)。続いて、文献調査を行い本剥製の歴史について整理した(第 2 章)。これらの知見をもとに、第 3 章では剥製業者への調査結果、第 4 章ではミュージアムへの調査結果を検証し、本剥製の保存と活用について分析した。第 5 章では、調査結果の中の本剥製に関する内容を抽出し整理した。このデータから、第 6 章にて日本におけるトラの本剥製の保存と活用について考察した。

第 1 章ではトラが絶滅の危機に瀕していることについて検討した。この背景には人間による狩猟行為がある。また、日本人との関わりについては、有史以来トラが日本列島には生息していなかったものの、諸外国との交流によって古くからその存在自体は知られていた。これらの資料を基軸に日本人のトラに対する価値観について考察を行った。

第 2 章における本剥製についての調査の結果、日本で製作がはじまったのは明治時代であることが判明した。さらに昭和の中期から後期にかけて本剥製は装飾品としても高い人気と関心を集めていたことを指摘した。

これまでに製作を行う事業者を対象とする学術調査は行われてこなかったため、剥製業者の活動の実態については明らかにされていなかった。そこで第 3 章では新たに日本の剥製業者に向けた調査を実施し、剥製業者の多くが技術者一名の個人事業主であることを報告した。技術者数が少ないことは剥製製作技能の継承に支障をきたす可能性があると考えた。また活動の変遷については、剥製業は 1980 年代に最盛期を迎えたが、ブームは次第に落ち着き、現在は下火傾向であることが判明した。

第 4 章では日本のミュージアムに向けた調査を整理した。その結果、本剥製の収集活動については、寄贈の受け入れを行う館が多いことが明らかになった。一方で「剥製業者に製作委託している」という回答も一定数見られたことから、剥製業者への需要が高いことを示唆

した。現在のミュージアム業界は、限られた剥製業者に製作を依頼していることが推測された。少数企業への依存が進むことは、剥製技能の継承や長期的な博物館活動という観点から懸念が生じている。本剥製の保存については、収蔵スペースの不足や保存を行う予算や人員の欠如といった課題があることが判明した。また、学芸員が不足している現状も定かになり、研究の専門性の担保やコレクションの保存管理作業に支障をきたす可能性があるとは指摘した。本剥製の活用については、一定数の本剥製が有効な活用機会を持たないまま保存されている状況が判明した。

日本におけるトラの本剥製について分析した結果(第5章)、全国の16館のミュージアムに53点のトラの本剥製が収蔵されているという実態が明らかになった。このうち、標本情報が残っていないという資料が全体の9割を占めていることが明らかになった。トラの本剥製の入手方法については寄贈の受け入れが多く、検察・警察からの寄贈も見受けられ、この事実はワシントン条約対象種であるトラの特徴であると結論付けた。さらに、ミュージアムにおけるトラの本剥製の活用方法は多岐にわたることが明らかになった。

最後に日本における本剥製について考察を行った(第6章)。はじめに、本剥製におけるトラの特徴について分析し、国際取引の規制のためにトラの本剥製が日本で製作されるケースは稀であると推測できることから、既存の貴重な資料を有効に活用する必要があると指摘した。さらに日本のミュージアムの収蔵庫は逼迫しており、資料の散逸が課題視されていることを整理したうえで、特に大型のトラの本剥製は収蔵に一定のスペースを要し、搬入や移動には大きな労力がかかるという事実を明らかにした。これらの知見を踏まえ日本における本剥製の取り扱いについての変遷と現状について分析した。その結果、剥製業者数の減少、ミュージアムにおける保存、教育機関における処分など、現在の本剥製を取り巻く課題の実態が明らかになった。こうした課題を解決し、より多くの本剥製が適切な取り扱いがなされるために今後の展望を提示した。本剥製は様々な価値を有する貴重な資料である。後継者の育成や剥製についての理解の促進、保存環境の整備や情報の蓄積など多方面での取り組みが求められる。本研究によって得られた知見と具体的な対応策の実施によって、今後の日本において本剥製を適切に管理する体制が整備され、剥製文化の継承、発展がなされることに寄与すると考察した。